

# 風立ちぬ、いざ生きめやも

——堀辰雄の母と子の物語—— (上)

松原秀江

## 要旨

堀辰雄の文学に大きな影響を与えた女性たちが、彼の前に常に親子がらみで現れることに注目して、その誕生及び幼少年期を見ながら、『聖家族』に至るまでの作品内容とそれらを比較し、親がらみと裏返しをキーワードに、『聖家族』の書名が「聖母子」ではなく、「聖家族」だったことの意味を考える。

キーワード…親がらみ 裏返し 志気と浜之助 幼年時代 芥川龍之介と片山広子・総子 『ルウベンスの偽画』 『聖家族』 『物語の女』  
絵草紙と水戸屋敷 向日葵

一

大正十二年(一九二三)九月、突如として起こった関東大震災は、堀辰雄の一生を決めてしまったと、言つてよいだろう。最愛の母・志気は、隅田川で水死し、既に変調をきたしていた彼の身体は、そのショックで結核にかかり、生涯彼を苦しめることになるのだから。しかも十月には、罹災して一時金沢に引き上げる室生犀星に、彼の文学の方向をほとんど決定することになる芥川龍之介に紹介されるのだから。

犀星は、わずか十九歳で両親を亡くしてしまった堀辰雄にとって、生涯父親のような役割を果たした人物である。二人の最初の出会いを、『わが愛する詩人の伝記』(復刻版 中公文庫)の中で、彼は次のように述べている。

大正十二年五月、私は当時田端の高台に住んでいた。或日お隣の奥さんが見え、わたし共の主人の府立第三中学校出身に堀辰雄という生徒がいるが、いちど紹介してくれと言われていますので、会つていただけられるかどうかというお話であった。私は何時でもと答えた。お隣は広瀬雄校長であり第三中学に芥川龍之介も在学していたことがあり、堀は当時二十歳だった。

或日お母さんに伴われてきた堀辰雄は、さつま緋に袴をはき一高の制帽をかむっていた。よい育ちの息子の顔付に無口の品格をもつたこの青年は、帰るまで何の質問もしなかった。お母さんはふっくりした余裕のある顔付で、余り話ができない人のようだった。これが私の堀のお母さんに会つた初めであり、そして終りであった。

と。

息子のことになると、「すぐもう夢中になつて」(花を持てる女)、数えで当時の二十歳にもなる一人息子の一大事とばかりに、付き添つてきてしまった母親。にもかかわらず、話らしい「話」も「できない」、「ふっくりした余裕のある顔付」のこの母親が、彼女が望んで育てたように、「殿様」然とした「無口の品格」のある息子とは違う、職人(上條松吉)の妻としての苗字をもつことの経緯を、犀星はこの時既に、中学の校長から聞いて知つていたに違いない。

朔太郎同様、詩を書く多くの青年たちが、近代詩の洗礼を受けたといわれる犀星が、辰雄を愛し続けた理由の一つに、その文学的資質のあることは、勿論見逃すことはできないだろう。辰雄は中学の頃数学を好み、第一高等学校も理科乙類（ドイツ語）を選び、将来数学者になることを夢見ていた。にもかかわらず入学後、生涯の親友・神西清に会い、「ツルゲネフ、ハウプトマン、シュニッツレル等の小説」や「戯曲」、「フランス象徴派の詩人の作品」などに親しみ、「ショウペンハウエル、ニイチェなどの哲学書」にも接してゆく（辰雄の書き込みによる 谷田昌平編「年譜」『堀辰雄全集』別巻二 筑摩書房）。そして大正十二年一月、朔太郎の第二詩集、『青猫』が世に出るや、神西清に勧められ、寄宿舎二階の寝室で、この詩集を「マントにくるまり」「何もかも打ち込んで」、夢中になって読み耽った。

今考へてみても、私が人生の入り口で、このやうな詩集を知つて、それにあれほど夢中になつて自分を打ち込むことができたといふことは、随分いいことだつたとおもふ。

（中略）十九歳（満年齢、筆者注、以下同じ）頃の私にそれらの「青猫」の詩がさうよく分かつてゐたとは思へない。——ただ、その暮れ方の室内の奥深くでしてゐる何ものかの羽ばたきのやうなものを私の魂は聴きつけてゐたのだ。さうしてそれが遠い實在へ切なくあぐがれてゐる一人の詩人のたましひの羽ばたきであるのをいつしか漠然と知るやうになつてゐた。……（『青猫』について）

と辰雄は後に記すが、傍点部分は、辰雄同様数学を好んだ、この詩の作者・朔太郎だけでなく、そっくりそのまま、「人生の入り口」にさしかかったわずか十九歳の辰雄の、何か「漠然」とした、切ない「たましい」の「羽ばたき」のやうなものでもあつたらう。そんな初々しい文学的資質に恵まれ、「殿様」然とした、しかも「どこかの俳優の子でもあるやうな」（我が愛する詩人の伝記）美しい青年に、生涯朔太郎と盟友であり続ける犀星は、その年の五月母親と共に出会い、その母親が九月にははや、隅田川で「火に趁われて水死」したことを知るのである。

彼女が維新以前は、霊岸島で「諸大名がたのお金御用達」を務め、苗字帯刀も許される程の大町人の娘だったこと、にもかかわらず維新後は没落、父親が転々と職を変え、失意の果てに脳卒中で死んでから、母親を助け妹や弟たちのために、芸者にまで身を落としていたのかもしれないことなど、「花を持てる女」（初稿、昭和七年発表、辰雄二十八歳）のまだ世に出ていないこの時、犀星は知らなかったに違いない。だが、辰雄と志気の苗字の違いから、辰雄が広島藩の士族で維新後上京し、裁判所に勤める妻もある堀浜之助の嫡男だったことは、隣の校

長から聞いて知っていただろう。犀星も同じような境遇に育っている。百五十石もの禄高を取る、加賀藩足輕頭だった父・小島弥左衛門には、妻を亡くした男の、老年(六十四歳)の子だったことを恥じられ、名前もないうちに、女中にすぎなかつた生母から引き離されて、ヒステリックな貫い子育ての女に、「私生児」として預けられたのだった。七歳でやっと、その女の内縁の夫である坊主の養嗣子になるが、しかし、弥左衛門の死後、行方の知れなくなった母親に憧れ続け、幼い頃負けず嫌いの餓鬼大将だった犀星にとって、しかもそのせいから、「小さい子どもや若い人たちに」大変優しく、「可愛らしい野の花」のように「美しくあたたかい」字で、丁寧に署名した犀星(『日本の文学』35 室生犀星)解説 井上靖 中央公論社)にとつて、当時「まだ幼いような顔」をした父親のない、非力な、しかも生涯結核に苦しむ辰雄は、見捨てておけない存在だったに違いない。

そんなことを心に置いて、辰雄の年譜を見ていくと、見逃すことのできない一本の太い線がある。それは片山総子にしろ矢野綾子にしろ、加藤多恵にしろ、彼の人生に大きな影響を与えた女性たちが、常に親がらみで登場し、彼あるいは彼女らが、その時々辰雄の文学の主題に、深くかかわっていることである。本稿では、この親がらみを中心に辰雄の文学について考えてみたい。

二

先ず片山総子から見ていこう。辰雄が総子に出会ったのは、大正十四年の夏だったと考えられている。

辰雄は大正十二年八月、五月に知り合った犀星に伴われ、初めて軽井沢に行く。西欧に異なり、高温多湿な日本には珍しく、「乾燥した高原地帯」である軽井沢は、明治二十一年イギリス人宣教師が別荘を建てて以来、ホテルや鉄道、電気・電話など、東京中枢部並みの設備がなされ、まるで「虹のよう」な「色とりどりの服装」の外国人(ルウベンスの偽画)の行き交う、「国際色豊かな避暑地」だった。下町に育ったとはいえ、維新後近代化・西洋化の実験場だった東京に、しかも、その流れの加速化される明治三十年代に生まれ、当時の教育の最前列の一つに位置していた第一高等学校にも学んでいた辰雄が、その時の驚きと喜びを、親友・神西清に次のように書き送った事は、よく知られている。

一日ぢゆう、彷徨ついでゐる。みんな、まるで活動写真のやうなものだ。道で出遭ふものは、異人さんたちと異国語ばかりだ……  
とに夜の街の彷徨は、たまらなくいい。僕の散歩のお友達は、舶來の煙草と詩人犀星だ  
など。また例えば、辰雄の愛読者ならだれでもが知っている次のような詩、  
(八月八日付書簡)

① 天使たちが

僕の朝飯のために

自転車で運ん來る

パンとスープと

花を

すると僕は

その花を筆つて

スープにふりかけ

パンに付け

そうしてささやかな食事をする



この村はどこへ行つても、いい匂がする

僕の胸に

風立ちぬ、いざ生きめやも(上)

新鮮な薔薇が挿してあるやうに

そしてまた、

② たまらなくたのしい四月のひろい野原だ

物倦くだまつて一匹の牛が青いろの草をたべてゐる

空にはおよいでいる白い雲 入道雲

柔らかな曲線をすべつて小鳥たちは微笑しながら

ああ なんと気持のいいのびのびとした静かさだらう

などといった詩を見るなら、若い辰雄は生命感にあふれ、有頂天だったに違いない。震災後、犀星にその親友・芥川を紹介された年の翌年七月、金沢の犀星宅に滞在、八月には軽井沢の芥川のもとに立ち寄り、「たっちゃん」(芥川)・「たっちゃんこ」(犀星)などと愛称されて(堀辰雄の二人の師「堀辰雄文学記念館編『堀多恵―談話集―野ばらの匂う散歩みち』)、松村みね子を知っただけでない、翌年東京帝国大学の学生になった辰雄は、既に実の親二人を亡くしていたにもかかわらず、軽井沢に部屋を借り、芥川や犀星・朔太郎、松村みね子一家などとともに、自転車でもハイカラだった当時、自動車でドライブなどして夏を過ごし、松吉には次のような書簡(九月三日付)を送っている。

すこし贅澤をし過ぎたやうだが、勘辨して下さい。なにしろ、一流の生活をみんなとしてゐたんだから。さうして、(中略)僕もだいたい一流の人々に可愛がられたんだから。いくらか堀辰雄も有名になったんだよ。

などと。新文学の旗手・画期的な天才詩人などと騒がれた「当代」一流の作家たち、芥川や犀星らに愛された軽井沢での生活が、辰雄個人にとってもその文学にとっても、どれほどのものだったか明らかだろう。辰雄が、

とにかく自分の作品らしいものが初めて出来た

(『聖家族』あとがき)

と言ひ、また「私の処女作といつてもいい」（『ルウベンスの偽画』に）とも、「何かほつとした」（『聖家族』あとがき）とも云っている『ルウベンスの偽画』は、「この夏のことを取材して美化して」できた（父への手紙）作品だった。彼自身が、

漸く自分のあるべき姿を見いだしたやうに思つた

（『聖家族』あとがき）

と述べているこの作品の「原稿」を、芥川に「読んで」もらっていた（『聖家族』あとがき）ことを見ても、地方に住んで「大家たちに近づけない」者が、『驢馬』に発表した詩の時同様、辰雄を「日当りのいい特別席」で「いい子になり、うまくやってやがる」、「甘やかされている」などと羨んだ（伊藤整『若い詩人の肖像』新潮文庫）として、なんら不思議ではない程の輝かしいデビューだったに違いない。

だが、この作品が「山繭」に発表されるのは翌々年の昭和二年二月、改稿されて（昭和四年一月）、次の年の五月に完成することに注目してみよう。というのもその間彼は、その芥川の自殺（昭和二年七月）に出会い、激しいショックの為、死に瀕する程の肋膜炎を患い（昭和三年一月）、病いに苦しんでいるからである。しかもその上、志氣の死後、松吉の彫金師としての仕事は振るわず、医者への支払いも滞り、深い絶望の日々を送っていた。

そんな辰雄に注目して、軽井沢にやって来たこの小説の主人公・「彼」が、少女の別荘を訪ねたり、その少女や少女の母親と一緒に、ドライブに出かけたりしていることを見るなら、これまで通り、主人公の「彼」には辰雄を、少女には片山総子を、その母親には、歌人でアイルランド文学の翻訳者でもある総子の母親・広子（松村みね子）を重ねて、その上更に、その頃「ボオドレエルかぶれしてゐた」（『堀辰雄作品集第一・聖家族』あとがき）作者・堀辰雄の、②の詩の中の、「雲」に憧れるようなロマネスクな心情を、追うことも許されよう。というのも、この作品の彼と彼女の会話が、彼女が「お病氣はもういいの？」と尋ねると、彼が「ええ、すっかりいいんです」と、答えることで始まり、しかもその後次のように続くからである。

彼は病氣のことは少しも話そうとはしなかった。そういう現実の煩さかったことを思い出すことは何の価値もないように彼は思つていた。その代わりに彼は、真白なクッションのある黒い自動車の中に黄色い帽子をかぶった娘の乗っていたのが、西洋小説のように美しかったことなどを好んで話すのだった。そしてその娘の香いがまだ残っていた美しい自動車に乗ってきたのだと愉快そうに言った。など。

美しい「西洋の小説」の一コマでもあるかのように描かれる、「黄いろい帽子をかぶった娘」は、おそらくルウベンスの肖像画の中でも「最も愛され」、その「輝くばかりの肌の描写は比類がない」と言われる《麦わらの帽子》(週刊グレート・アーティストNO・61)をふまえ、しかもこの絵の帽子が麦わらでないだけでなく、色も黒であることを思えば、辰雄のこの作品の次の部分、

彼は(中略)中庭に咲いている向日葵の花をぼんやり眺めていた。それは西洋人よりも背高く伸びていた。

や、①の「天使たちが……」で始まる詩の一節、

西洋人は向日葵より背が高い

などと無関係でないだろう。事実この娘は、「ドイツ人らしい娘」だった。

しかもその上「その娘の匂い」が、「薔薇のにおい」だったことにも注意してみよう。同じ薔薇科の植物でも、当時薔薇は、江戸時代までの桜に代わり、色恋の対象だった芸者や芸妓とは違い、進取の気性に富む青年(学生・書生)たちを熱狂させたLoveの翻訳語である恋愛の対象で、文明開化、即ち近代化(西洋化)の時代にふさわしい知的な女性たちの髪や胸を飾る花でもあった。この作品でも「薔薇のにおい」の娘は、西洋小説の一コマのように「美しく、車の中でし散らした「つばのあと」さえ、彼には「妙に荒々しい」にもかかわらず、「新鮮」で快く、「筆りちらされた花卉」(薔薇の花卉)のように見えている。そしてそれは、病身の彼が、「ぼんやり」眺める「背」の「高い」「向日葵の花」や、

大胆な明暗表現と、生命感にあふれ躍動する人体表現によって、バロック絵画の一頂点を築いた。

などと言われ(『日本国語大辞典』小学館)、

そのスケールの壮大さ、豊麗な色彩、感情表現の深さは、見る者を完全に圧倒する

などとも言われる名作を続々と発表した(『世界伝記大事典』ほるぷ出版)「ルウベンス」とも微妙に響き合い、既にみた①の「花」も、先ずは何といっても第一に、薔薇(野薔薇でもいい。だが、色は「雲」同様、辰雄の好きな「白」、清らかで時にはブルー、そして七色にも輝く「雪」のように、神聖で近づきたい「白」だったろうか。しかもその「いい匂い」のする「新鮮な」花が、「僕の胸」にも挿してあるのなら、それは辰雄を「家宝のやうに」大切にし、彼の「作品にあらはれるとほりの」「眩しいような」「下町風の端正」な美しさを持ち、彼が生涯忘

れることのなかった実母・志気の死後、結核を患う辰雄の看護も兼ね、志気の死後さえない松吉が、松吉自身の世話をさせるために、家に入れていた金井でい、

正式の後妻というのではないにしても堀にとつては母親も同然の位置を占めてゐただらう

と推定され（福永武彦「内的独白―堀辰雄の父、その他―」 福永武彦全集17 新潮社）、やがて松吉の養女になり、辰雄の看護に献身的だったにもかかわらず、松吉の死後向島を離れることになる「ていさん」も住む、その下町も含めた「現実の煩さ」さを嫌い、「のびのび」と静かで、「空気」もよすぎる程「気持のいい」軽井沢に憧れる辰雄の心の奥に、深く秘められた何か、遙かな希望の「虹のように見えた」「色とりどり」の「服装をした西洋婦人」のように、あるいはまたポオドレルが、その散文詩「スウブと雲」の中で、「スウブをすすするのも忘れて窓からうつとり見とれていた」「雲」（「聖家族」あとがき）のように、どうしようもなく彼を、芥川や犀星・朔太郎、松村みね子（片山広子）などが深く関わる、文学の世界にかりたて、「何とかして一度でもいいからこの手に触つてみたいと思いつめてゐた」ロマネスクなあるもの、非情な「現実」に疲れ、打ちひしがれた天涯孤独の彼に、希望と命を与える「向日葵」のように、キラキラと輝く高くて遠い、遙かな彼岸の彼方にある何か聖なるものだったのではなからうか。

にもかかわらず彼は、向日葵のような「黄色い帽子をかぶった娘」を、「西洋の小説のように美しかった」と、「好んで」話したその彼女を、

いつもこつそりと（中略）「ルウベンスの偽画」と呼んでゐた。

「ルウベンスの偽画」とは、とらえどころのない「雲」のように、彼が憧れ「自分勝手につくり上げ」た、現実にはない「空想の中」の「心像の少女」のことである。「離れてゐる間中」、彼が「たまらなく会ひたがり」、「そのあまりに」「自分勝手につくり上げてしま」い、そのために「今度はその心像が本当の彼女によく似てゐるかどうか知れた」くなつて、「ますます彼を彼女」に「会ひたがらせる」少女のことである。だがしかし、だからこそ彼は、実際に自分の目の前にいる少女、「自分」との「関係がちつとも思うように進行しない」「本当の彼女」が、「その心像の少女とはまったく別な二個の存在であるような気もしないではな」く、

ひよつとしたら、彼の描きかけの「ルウベンスの偽画」の女主人公の持つてゐる薔薇の皮膚（それは「輝くばかり」に美しい《麦わらの

帽子》の女の肌をふまえているに違いない) そのままのものは、いま彼の前にいるところの少女には欠けているのかもしれないのだ。などと思われてくるのである。

とすれば、その「いま彼の目の前にいるところの少女」、「本当の彼女」即ち「彼」との「関係がちつとも思うように進行しない」少女は、これまで言われてきたように、ほとんどそのまま、芥川や広子を介して辰雄が知り合った広子の令嬢の片山総子、紛れもなくこの世の「煩い」「現実」に生きて、様々なことを思い惑わざるを得ない総子につながってくるだろう。

三

というのも、先ず総子は辰雄と「仲」がよく(深田久弥「編集同人のこと」復刻版文学昭45・6)、「色々話題」があり(福田清人「文学」発行の頃)復刻版文学昭45・6)、「まったく想像にすぎないが」などと言われながらも、「彼(堀)の愛の対象だった」(谷田昌平『現代作家全集 9 堀辰雄』五月書房)とも、言われているからである。にもかかわらずまた、丸岡明が次のようにも言っているからである(「座談会」堀辰雄の人と文学」国文学解釈と鑑賞 昭36・3)。

宗瑛さんがほくのところに来て堀辰雄という人間は非常に卑怯な悪いやつだと云う。軽井沢でのことだが、道で馬車などが来ると自分がよける側へわざと来る。そこに雑誌社の記者なんかがあると、あたかも何かさういった雰囲気の中に二人がいるかのように見せる。そのためになたたくしの結婚話がみんなこわれてしまったと言いに来た

と。そして更に、  
女の人の抗議したい気持ちは分かるが、第三者の私などには、からかうような気持もあっておかしくしょうがなかった。  
などとも。

片山総子は、大正十三年十二月創刊の雑誌『山繭』に、辰雄らと共に参加した兄・達吉(辰雄の友人で評論家)の影響だったと云われるが、宗瑛の名で小説を書いている。昭和三年から矢継ぎ早に発表したその「幻想性豊かな虚構の世界」は、高踏的な兄・吉村鉄太郎(達吉

の筆名)の批評にもよく耐え、辰雄もその「奔放」で力強い「人間の意識下への凝視」に注目し称揚して、強く推奨している。だが昭和九年五月、東大法科卒の銀行員でもあった兄の友人で、後に内閣東北局長になる山田秀三と結婚するや、筆を折り「文壇の表舞台から」姿を消してしまった(竹内清己『堀辰雄事典』勉誠出版)。

辰雄の綾子に対する愛は、辰雄の一方的なものだったのだろうか。思春期の少女の常として、辰雄の好意に無邪気に答えることはあっても、そしてまた小説家としての活躍も、それはほんの一時期の気まぐれにすぎなかったのだろうか。そもそも綾子にとって、下町育ちの貧乏で肺を病むやくざな文士との結婚など、論外だったのかもしれない。

だが、綾子の婚姻届が遅れるのは何故だろう。彼女の父・貞次郎は、日本銀行の理事を務め、母・広子も既に見たように、著名な歌人でアイルランド文学の翻訳者、賞をもらうほどのエッセイストだった。そんな両親のもとに生まれ育ち、父親の死後も、第百銀行に勤めるような兄がいて、「ほぼ毎年のように軽井沢に出かけ」、幼稚園から大学まで聖心女子学院にも学んだ程の令嬢の婚姻届が、なぜ五か月も遅れるのだろうか。彼女の言うように、辰雄との噂が、現に災いしたのだろうか。だがひよっとして、婚家先よりも、彼女の方に原因があった。つまり何か迷いのようなものがあつたと、考えるのは考え過ぎだろうか。

昭和八年六月から発表され始め、翌年四月には刊行された『美しい村』には、「最近私を苦しめてゐた恋愛事件をそっくりそのまま」書こうとしていた作者(私)が、「思ひがけない」「一人の少女」、ここでも又まるで、

一輪の向日葵が咲きでもしたかのやうに

「まぶしいほど」「きらきら」輝く「少女」に、出会ったことが記されている。「繪具箱」をさげたこの「背の高い、瘦せぎすな」少女が、『風立ちぬ』の節子のモデル、矢野綾子だといわれている。そして「私を苦しめてゐた恋愛事件」の相手が、「この土地で知り合ひ」、「花やかな」「思ひ出」を残して、最近その心もわからないまま、「悲しい」別れをした「女友達」であるなら、そのモデルは改めて言うまでもなく綾子だろう。辰雄が綾子を知るのは昭和八年六月、翌年(九年)四月に『美しい村』が刊行され、九月には綾子と婚約している。そして一〇月、五月に結婚した綾子は、婚姻届を出すのである。

綾子は、夫を亡くした母・広子が、おそらくは上流社会に暮らす女性らしく、「貞女両夫にまみえず」といった江戸時代以来の規範の中

で、困惑しながらも芥川を愛したように、まず芥川を「裏返し」にしたようにそっくりな辰雄を、母と同じようにひそかに、あるいはそれと「殆ど意識」せずに無邪気に、愛していたのだろうか。たとえ彼女が、『聖家族』(昭5・11)に「あたかも」、辰雄の「恋人でもあるかのように描かれていることに」、非常に「当惑」し、「誇りを傷つけられ」たと感じ、辰雄に対して「我慢」のならない「疑惑」をもったとしても。

『ルウベンスの偽画』には、どうかするとその声が、「ルウベンスの偽画」、即ち彼の「空想の中」の「心像の少女」にそっくりな、「意地悪さうな」「或る有名な男爵のお嬢さん」が描かれて居る。「刺青をした蝶のように美しい」この女性は、去年は混血児らしい青年たち(彼らは山の手に生まれ、下町で育った辰雄によく似ている)を群がらせ、そのうちの一人の青年を特に、「ずっと彼女のそばに付添」わせて、「テニスやダンスの相手」をさせていた。にもかかわらず今年はすれちがっても、「すこしも気づかぬやうに装ひながら」、全体が上品で、「去年の混血児たちとは」全く違い、「すべてがいかにもおっとりして貴族的」な青年と共に、自転車<sup>サイクリング</sup>を走らせたりしている。作者(彼)は、この頃になつてこのお嬢さんはやつとかの女の境涯を自覚したのかもしれない。

などと記すが、総子もたとえば、

戦前の都会の知的な中産階級の女性たちの、或る種のタイプ

とも言われる菜穂子のモデルだったとされる総子も、「虹」のように美しくても、儂い「雲」のような「夢の限界」など、まともに突き止めようとせず、自らの「境涯を自覚」してか、

なんでも自分のなさりたいと思ふことをしてもいいと思つてゐるやうな天才なんていうものは、私は少しも自分の側にもちたいとは思つてゐませんわ。……

とばかりに、やがて自殺して亡くなる芥川に代表されるやうな文学や、下町育ちの肺を病む「貧乏な」辰雄など、捨ててしまったのだろうか。そして「上流社会」の「豊か」で健康な彼女にふさわしい、「世間並みに出来上がった」男を、夫に選んで、賢夫人にでもなろうとしたのだろうか。

もつとも辰雄は、私小説作家とは違い、

・私は一度も私の経験したとほりに小説を書いたことはない。

・他人の前にも何もかも告白したいといふ痛切な欲求からそれを書いたことはなかった。

と言つてはいる。だがまた一方では、

そうかといつて自分の感じもしなかったことは一ぺんも書いたことはない。

とも言っている（『小説のことなど―モオリヤックの小説を読んで』。しかも更に、辰雄は菜穂子に、

結婚してしまえば、すくなくともそんな果敢ないものからは自由になれるやうな気がするわ…

とも思わせているのだから。だが「その果敢ないもの」が、実際は総子には真実向けられていなかった辰雄の心だったらどうだろう。

というのも、犀星が堀は、彼女の母である「片山ひろ子を好いていた」と言い、彼女の名前を、

いつも平假名でかいてある時のやうに、か、た、や、ま、さんと呼び、かとの間にみじかいあまつたれた時間を置いて、呼んでゐた

と、証言しているからである（『詩人・堀辰雄』『黒髪の手』昭30・2新潮社）。丸岡明も犀星が、

堀君はお母さんの方を好きでいながら、それを自分では気づいていないようだね…

と、「ささやいた」と記している（『風立ちぬ・美しい村』「解説 堀辰雄―生涯と文学」角川文庫）。

しかもその辰雄自身が、次のように回想していることにも注目してみよう。即ち、

「異国の文学にのみ心を奪われて居つた」当時の自分に、歌人でもあり翻訳家でもあつた松村みね子（片山広子）が、「更級日記」と

いう「古い押し花のほひのするやうな奥ゆかしい日記」を紹介してくれた。「そのかすかなかれたやうな句の中から突然ひとりの古

い日本の女の姿が一つの鮮やかな心像として浮かんで来だした。それは私にとっては大切な一瞬であつた。」

と（竹内清己『堀辰雄事典』勉誠社）。この「古い日本の女の姿」に、片山広子だけでなく、辰雄の既に亡い母・志気も重ねるならどうだろう。

松村みね子は、ニューヨーク領事も務めた外交官の長女として生まれ、大蔵省勤務の後、日本銀行理事にもなつた片山貞次郎と結婚、その夫に死別して五年後、芥川から想いを寄せられた女である。「梔子夫人」と陰で呼ばれたように、寡黙で貞淑な十四歳も年上の未亡人

だったにもかかわらず、書簡の一部から、「さそいをかけ」「おつきあいをしたい」と言ったのは、「彼女の方から」だったと、考える研究者（吉田精一著作集第二巻『芥川龍之介Ⅱ』桜風社）もいる。一方志気は、維新前まで霊岸島で諸大名方のお金御用達を務め、苗字帯刀も許された程の町人を父に持ち、維新後没落、刀屋・骨董屋へと転業して失敗したその父親が亡くなると、母親や兄弟を抱えて、芸者にまで身を落としていたらしい。そして「眩い」程「美しい」彼女は、妻のある堀浜之介の子・辰雄を生んだのだった。その志気が、「かわいくてかわいくて」いつまでも手放せない辰雄をつれて、「同居していた」浜之助宅を「飛び出し」、やがて彫金師の松吉と再婚した後も、辰雄に自らと同じ上條ではなく、堀の姓を名乗らせ続けたのは、ただ単に浜之助の死後の恩給だけが目当てだったのではないだろう。辰雄を「殿様のように大切に、特別扱いに」して育てたのも、幼いころは殿様の近習小姓で、広島藩の士族、上京後は裁判所で書記の「監督のやうな」仕事をしていた浜之助を、終生大事に想い続けていたからではなからうか。それは幼い辰雄が、浜之助の「何かの折」の「文官の礼装」のやうな、「白い羽のふわふわした大礼帽をかぶり、口髭をぴんと立てた」「えらい人」の「胸像」が大好きで、そんな仁丹の看板のやうな「口髭をはやし」た人には、「何んとなく」「温かな信頼」「感や安心感、そして好意のやうなものまでもっていたこと、のみならず、生れた平河町の堀の家のような、「立派な門構えの、玄関先きに飛石などの打つてあるやうな屋敷」を見かけると、

あたいのうち……あたいのうち……

と、急に「駆けこんでいって」「みんなをよく困らせた」こと、そしてまた、「ごく小さい時分」だが、「どこか山の手」の「遠いお寺に墓参りに連れられてい」き、その途中の「電車の中」で、突然「ゆりおこされ」、

辰雄、辰雄、ほら、あの横町をごらん、あそこにお前の生れた家があつたんだよ……

といわれたことなどにも、浜之助を忘れない志気の心の内を、垣間見ることができるよう思われる。とすれば志気に溺愛されて、いつのまにかその頃のこと、現在の気もちと緬い交ぜになってしまっている（「幼年時代」幼年時代を送り、バトラアやハルトマンに言及して、

「無意識的なるもの」が我々の生の根元になっている

〔マルセル・ブルウスト〕

と言つてはばからない辰雄が、『聖家族』によれば、貞淑な未亡人ではあつても、芥川を熱烈に愛していたに違いないと、辰雄に思はれる

松村みね子と、「才力の上にも格闘できる女」と言われた彼女への危機的な想いを、「越びと」や「相聞」などの抒情詩を書くことで脱した偉大な作家・芥川を、間近で見て居るうちに、いつの間にか知らず知らず、そんなみね子を、辰雄が生涯忘れることになった母、「勝気で、しっかりした」志気になぞらえ、偉大な作家・芥川が、辰雄の「無意識」のうちに沈んでいる「口髭をはやし」た「えらい人」、父・浜之助にかわる人だったらと、思うようなことがなかったと言えるだろうか。『菜穂子』にも、次のように記される一節がある。

あの僕の大好きな菜穂子さんのお母さんのように……

と。「僕」即ち都築明のモデルは辰雄、菜穂子は総子、その母・三村夫人は広子（みね子）と言われている。三村夫人が、

・私の父は或る知名の実業家であったが、私のまだ娘の時分に、事業の上で取り返しのつかぬやうな失敗をした。

・お前のおぢいさんと云ふのが大變呑氣なお方で、ことに晩年は骨董などにお凝りになり、すっかり家運の傾いた後だったので、お前のお父様と私とで、それを立て直すのに随分苦勞したものだつた。

・私はいつもその母に「お前は女でもしつかりしておくれよ。（中略）」と云つて聞かされていた。

などといった部分も、維新後の勝気でしつかり者の志気の娘時代に似通うだろう。

しかも辰雄は、芥川と同じ辰年に生まれて下町に育ち、中学校（府立第三中学校）も高等学校（第一高等学校）も同じである。そして大正十二年九月、関東大震災で志気を失い、十月犀星に芥川を紹介された辰雄は、十一月には高々十九歳で、その芥川から手紙をもらっている。その手紙には、送った二編の詩に対して、「あなたの捉へ得たものはなさず、そのままずんずんお進みなさい」といった感想が記されていた。そしてその手紙の最後には、

なほわたしの書架にある本で読みたい本があればお使ひなさい。その外遠慮しちやいけません。又私に遠慮を要求してもいけません

とまで書かれていた。しかもその芥川が、死の直前（二か月前、昭和二年五月）に発表した随筆、「僕の友だち二三」には、辰雄について、

東京人、坊ちゃん、詩人、本好き——それらの点も僕と共通してゐる

と記されていただけでない。「旧時代」の自分に対して、堀は、「新感覚」に恵まれた諸家に、「少しも遜色のある作家ではない」とまで、言い切っているのである。その言葉通り竹中郁は、亡くなる十日前澄江堂の二階で、辰雄とともに初めて芥川に会った時、「何とも云えぬ

魅力のある話しぶり」だったことを回想して、芥川の辰雄への「よい薫陶」ぶりを記している（堀君の《聖家族》季刊文学2）。

そんな、前世があれば親子だったかと思われる程親しげな芥川に、既に見たように辰雄は「原稿を読んでもら」い、「処女作と言っている」とまで本人が言った「ルウベンスの偽画」が世に出るのが、芥川の死の五か月前。そしてその定稿が出た同じ年の十一月には、「真白な封筒のやうな堀君の自作本」（同上）と言われる『聖家族』が発表されるのである。この作品が何故、『聖家族』と名付けられたのか。たとえば『堀辰雄事典』（竹内清己編 勉誠出版）には、次のように記している。

夢の中で九鬼が示した一枚の絵に対して扁理は、「ラファエロの聖家族」だと答える。タイトルはそこから来ているのだが、この作品には、実は聖「家族」のイメージはない。九鬼と扁理と細木夫人と絹子、その四人の関係からどんな「聖家族」を織りなすことが可能だろうか。そもそもラファエロの聖母（あるいは聖母子）の絵を、堀辰雄は何故「聖家族」と呼んだのか。（傍点筆者）

と。既に亡い九鬼のモデルは芥川、扁理は辰雄、細木夫人は広子、絹子は総子である。「ルウベンスの偽画」の中で、「彼女の母」（モデルは広子）は、別荘の「露台の上からあたたかも天使のやうに、彼等（モデルは辰雄と総子）を見下ろしてゐる」。そしてこの作品には、ホテルの「中庭に咲いてゐる向日葵の花」が、「西洋人よりも背高く伸びてゐた」と記され、背の高い西洋人の「若い女の顔はいかにも神々しく思われた」とも記されるが、『聖家族』の細木夫人の部屋は、「二階にあつて、向日葵の花の咲いている中庭に面してゐた」。しかも「向日葵の下から」「その部屋をみあげ」る扁理には、それが「非常に神聖な、美しい、そして何か非現実的なものやうに思はれるのである。

そして更にそんな夫人を、「心から尊敬してゐるらしい」「brillantといふ字の化身のやうな『物語の女』の中の今は亡い森於菟彦（芥川がモデル）。これ以上もう何も付け加える必要はないだろう。福永武彦が辰雄にとって、

芥川龍之介が謂わば精神的父親の代わりをつとめたことは見逃すわけにはいかない。

と言っている（前述「内的独白―堀辰雄の父、その他―」ことを記すまでもなく。

その『聖家族』は、辰雄が「ただもう何かに憑かれたやうになつて、一週間ばかりでかきあげてしま」い、彼自身が「やや本格的な作品」とまで言った自信作である。それは、翌年江川書房からこの作品を上梓するに当たつて、横光利一がその本の序文で、

聖家族は内部が外部と同様に恰も肉眼で見得られる対象であるかの如く明瞭に私達の現実の内部を示してくれた最初の新しい作品の

一つである。

と述べ、「堀氏の一時代の頂点を示す作品」だと云った通りの作品だったのだろう。

にもかかわらず辰雄は、脱稿後咯血して自宅で療養し、翌年、九歳で父親を亡くした後、母親が彼の教育のために再婚し、辰雄と似た境遇の中で育った生涯の親友・神西清に勧められ（後にも見るように、犀星や芥川だけでなく、辰雄の周りには、何と多くの似た境遇のすぐれた人達が集まってくるのか）、以後大きな影響を受けることになるブルーストの『失われた時を求めて』を読み始める。そしてあたかも自らの「失われた時」を振り返るかのように、「病中、なぜかしばしば」その「胸中を去来した」「幼児の追憶」を素材に、『本所』（後『水のほとり』『墓畔の家』『向島』）を書き始めている（『聖家族』あとがき）。だが病状は好転せず、絶対安静が続く。辰雄は志気が水死した時も芥川が自殺した時も、その直後休学するほどの大病にかかっていた。この時も何か、精神的に強い衝撃を受けるようなことがあったのではなからうか。おそらくそれは、彼が愛していると思いい込んでいた総子にかかわることだったに違いない。

#### 四

この年昭和六年、四月から三か月間、辰雄は信州の富士見高原療養所に入院、八月中旬から一〇月上旬まで、軽井沢に滞在している。しかもその間、八月中下旬から八月二十八日まで、片山家別荘に避暑と療養を兼ねて居たらしく、その「親密さ」が注目されている（池内輝夫「資料紹介 堀辰雄の書簡一通及び宗瑛の写真など」大妻国文15）、谷田昌平も、「宗瑛（片山総子）の招きで」と言っている（『訂補堀辰雄年譜』『堀辰雄事典』勉誠出版）そのことに、注目してみよう。というのも、片山家そして総子の辰雄に対するこのような厚意（好意）が、孤独な辰雄に家族同様の幻想を抱かせ、辰雄に憧れの文学や芥川を中心にした疑似家族を夢想させて、総子に対する恋愛感情を育てることになったかとも、思われるからである。

明治四十三年実父・浜之助が死去した年、六歳の辰雄は、誰もが指摘するように、後の作家・堀辰雄を考える上で、逸することのできない体験をしている。『幼年時代』によれば、その一つは洪水のために、神田連雀町の昔風の大きな問屋・きんやさんに避難した折の体験で

ある。辰雄を可愛がつてくれた店の若衆を通して、美しい「絵草紙」の世界、それは赤穂浪士討入の図のようだが、「赤い門の前」や、「雪の庭の大きな池の上にかかった橋の上」で、群がり闘う「若い義士」たちの、ドラマチックで異様に美しい姿に見入り、「一種の興奮」とともに、現実とは「全然別箇」の「物語の世界」を、「はじめて」知ることになる。それは、「どこことなく薄暗い」、「問屋がまえの、大きな「古い家」の「母の膝下」で、幼い辰雄に「一種の切なさ」とともに、「どこか遠いところから来る云い知れぬ感動」を与えていた。そしてまた一つは、そこから引越した新小梅町の水戸屋敷裏で、庭のある華族の大きな屋敷をのぞき見、「自分たちがいる世界とは全く別の世界」のあることを発見したことである。この二つの世界は、「他のいかなる大きな現実の出来事より」も、辰雄の「小さな人生の上にその影響を徐々に目立たせて」、やがて彼を文学の世界へと、導いていったといわれるが、他の誰でもない堀辰雄という一人の文学者を考える上で、ここで特に注目したいのは、この二つの世界が、不思議なことにとの部分もみな、おばあさんが大名行列のような華やかな嫁入りをして来たという、没落以前の志気の家族も含めた、維新前の徳川氏の世界につながり、幼い辰雄に「切なさ」や「何とも云いようのない寂しい、気もち」と共に、「そこから生ずる一種のとりとめのない憧憬の心」を抱かせていることである。

既に見たように、辰雄は志気に溺愛され、殿様のように大事に育つたにもかかわらず、「寂しい」幼年時代を送っている。その原因の中でも特に大きいのは、誰もが一度は、橋の下から拾ってきたなどとかかわれて泣くように、自分は「上條のうちの一人息子」なのに、「小さいときから堀の跡目をついで」、父とも母とも苗字が違うということだろう。小学生になって、「自分の苗字を呼ばれても」、「一ぺんでもつてそれに返事をした事はな」く、「その新しい苗字を忘れまいとすればするほど、いざという時になってそれをけろりとわすれて」いる幼い辰雄。そしてその理由を彼なりに考えて辻褄を合わせながらも、付きっ切りでハラハラする志気に、

……いいかい、お前の苗字を忘れるんじゃないよ……

と言われると、「うん……」と答えて、その理由を聞こうともせず、「まるで自分の運命そのもののように、それを鵜呑みにしようとする努力」する辰雄。それは、皆が「およんちゃん」と呼んでいるお婆さんだったらしい「一番小さなお婆さん」が、「みすばらしい煙草屋の二階に」、「一人で間借りしているのが、何か、子供」心にも「悲しくて、悲しくてならなかった」ことや、母が父（松吉）と一緒に住むようになってから、甘えていて誰よりも恋しかった、年とったお婆あさんが、「ときおりしか姿を見せ」ず、辰雄達の「居心地のいい家」にいないで、ど

こかよその家に行っているのが、何だか「かわいそう」でよく泣いたこと、そしてまた、「私のお守ばかりしていた」そのおばあさんが、大川に連れ行って行ってくれ、「落ちたらと気づかなくて」、「いつも土手のこちらから」「川を眺めさせる」だけだった時、「もつと川のふちへ行ったがったりして」、ほんやりもの思いにふけっているその「おばあさんを困らせ」「苦しめる」ような事は、「一度も」したことがなかったと、記されていることなども、無関係ではないだろう。そしてそれは辰雄が、

私が、自分の幼年時代の思い出の中に見出す幸福という幸福のすべてが、いかにそれらの子供らしい悲しみにまんべんなく裏打ちされていることか……

と述べる通りのものだったと思われる。「母の膝の上に乗せられるのが好きだった」辰雄の「幸福」の全ては、いわば「頭の悪い」あるいは「無器用な」「天使」の、悪戯としかいいようのないような、「悲しみ」に「裏打ち」されていた。にもかかわらず幼い辰雄は、それは「自分の運命、そのもの」のように「鞆飲み」にし、「お互いにやさしく愛し合って」いる人たちを、「困らせ」たり「苦しめ」たりするようなことは一切せず、

母やおばあさんに、何ということもなしに、甘えるだけ甘えて、いつまでもむずかっているより他はしようのない自分自身を見出すのだった。

と記している。そして更に、なんとという繊細な優しさ・愛らしさだろうか、

そうやっていつまでもむずかき、甘えていられる対象が自分の身近にあるというだけで、それだけでもう少年にはよかったのだ。幸せだったとも述べている。

だが、そんな境遇は、時には本心を隠し、常に周りを忖度して、「はにかみや」でどもるような無口な、場合によってはかなり複雑な少年を、人間を育てずにはおかないだろう。『聖家族』を見てみよう。改めて言うまでもなく、九鬼のモデルは芥川、「その九鬼を裏返したような」扁理は辰雄、そして細木夫人は広子、絹子は総子である。まず次の部分を見てみよう。

九鬼はこの少年を非常に好きだったらしい。それがこの少年をして彼の弱点を速かに理解させたのであらう。九鬼は自分の気弱さを世間に見せまいとしてそれを独特な皮肉でなければ現はすまいとした人だった。九鬼はそれになかば成功したと言っている。だが、彼

自身の心の中に隠すことが出来れば出来るほど、その気弱さは彼にはますます堪へ難いものになつて行つた。扁理はさういふ不幸を目の前に見てゐた。そして九鬼と同じやうな気弱さを持つてゐた扁理は、そこで彼とは反対に、さういふ気弱さを出来るだけ自分の表面に持ち出さうとしてゐた。彼がそれにどれだけ成功するかは、これからの問題だが。――

九鬼の「不幸」を目の当たりにした結果とはいへ、普通の人間なら、心の中に隠すはずの気弱さを、「表面に持ち出さう」というのだから、二重の複雑さだといえるだろう。また次の文章は、扁理が整理をしていた九鬼の蔵書の中のメリメの書簡集の中に、「女の筆跡らしい」「古い手紙の切れつばしのやうなもの」を見出して、自分のアパートメントに来ていた封筒から、九鬼が細木夫人を愛していたように、夫人もまた九鬼を愛していたに違いないとの確信を得る部分である。次のように記されている。

彼は丁寧な封を切りながら、ひよいと老人のやうな微笑を浮かべた。何も彼も知つてゐるんだと言つた風な……

――扁理はそんな風に二通りの微笑を使ひ分けるのだ。子供のやうな微笑と老人のやうな微笑と。つまり、他人に向つてするの自分に向つてするのとを区別してゐるのだ。

そしてさういふ微笑のために、彼は自分の心を複雑のだと信じてゐた。

と。二つの「微笑」を使い分ける扁理だが、にもかかわらず、彼は自らの「貧しさ」を、「豊かな夫人たち」(細木夫人と絹子)の前で、「無邪気な微笑をみせながら」、「子供らしい率直さで」「告白する」。そしてこのことで、夫人たちを驚かし満足するだけでなく、彼自身も驚いている。扁理が辰雄であるなら、それは「二十何年」も「住んで」、「何もかも變つてしまひ」、その為に「愛着」があるわけではなく、何時「去つても心残りはない」と、思つてゐる(向島)下町を抜け出し、軽井沢に遊ぶ芥川や広子たちの世界に近づこうとしてゐる辰雄にとつても、意外な発見だったかもしれない。だが、この「子供らしいさ」は、「二十四孝」に七十にもなつて、「いとけなき者」の振舞をし、「親に仕へた」老萊子の故事があるように、親の知らないところどころでどんどん「成長して」、いつの間にか「見知らない青年になつて」しまひ、さうな辰雄の中に、犀星のやうな一角の人間の前では、「余り」話もできない母・志気が、「不安」げに「落ち着かず、探してやまないものだった(『麦藁帽子』)ことも、おさえておこう。

だがこの「子供もらしい率直」さは、辰雄が父とも頼む芥川、即ち「九鬼が心から尊敬し」「よほど好き」だったらしい細木夫人(広子)

を、彼即ち扁理の「犯し難い偶像」にして、夫人には「まだあまり似て」おらず、「なんとなく」「氣に入らなく思はせた」絹子に、扁理を近づけたと同じように、「最後の」「精神的な」恋だっただけに、芥川が「きわめて真剣な、切ない、憶いをひめ」て愛した広子（吉田精一著作集第一巻『芥川龍之介Ⅰ』桜風社）を、密かに愛していた辰雄を、その身代わりのように総子に近づけたのだらうだろう。キリスト教絵画の『聖家族』には、幼児イエス・キリストと聖母マリア、そして養父・ヨセフの三人が描かれている。福永武彦に限らず、辰雄は松吉に対する「いたわりの配慮」から、父親について「知っていて知らない顔をしていた」と、考える者もいる。福永が短編『挿話』（後に『秋』と改題して、『幼年時代』の付録に収録）を引き合いに指摘するように、姓も商売も違う松吉が、辰雄が成長するにつれ、辰雄の「世界からはみ出し、殆ど関心を惹かない存在になって」いった（以上『内的独白』）としても、不思議ではないだろう。そんな隙間に芥川が精神的な父親として滑り込み、広子とともに辰雄の求める『聖家族』を作ったとしても、しかし総子に相当する女の子の入る余地はない。その上総子がモデルの絹子は「少女特有の敏感さ」で、「扁理の気持ちに彼女から遠くにあることを見抜いていた」と記されている。総子は辰雄その人が、「何時のまにか」深く学び、「実によく自分のものにして」しまった「ヂエムス・ヂヨイスの方法」で、「人間の意識下をそっくりそのまま、生き生きと表現する」ことのできる作家として、辰雄を「全く知らない世界へずんずん引っ張り込んでしまう」と、絶賛した宗瑛その人だった（『宗瑛の作品について』昭5・1『文学』）。

だがしかしまた、「九鬼の死によって」、「あまり悲しそうにしてゐる」「母の女らしい感情が」、絹子の中に「まだ眠ってゐた或る層を目覚めさせ」、その「母の眼を通して」、「裏返しにした九鬼を」、即ち「扁理を見つめ出した」と同様に、その「多彩な想像力によって非日常の世界を創出し」、一時期文壇で騒がれた総子（宗瑛）も、辰雄を亡くなった偉大な作家・芥川の裏返しとして見つめ、執着していたのだらうだろう。綾子と婚約した一ヶ月後（昭和九年十月、辰雄三〇歳）、辰雄がようやく書きあげて発表した『物語の女』を読むと、総子の本命は辰雄などではなく、母親の広子が、思いもよらず愛してしまった芥川だったかとも思われてくる。この作品の「お前」（葉穂子、総子がモデル）が、ホテルのベッドで横になっている森於菟彦（モデルは芥川）を、一人で尋ねた時の場面は、決して見逃してはならないだろう。即ち、

お母さんも、百合のほひはお嫌いよ

風立ちぬ、いざ生きめやも（上）

という菜穂子に、

お母さんもね……

と、「ひどく素気ない返事」をする於菟彦に、菜穂子はまず「むっとし」ている。女の子らしく亡くなった父をいまだに愛していて、於菟彦が母との不和の原因だったにもかかわらず、彼女はやはり母を愛していたのだろうか。だがその時於菟彦が、庭で写真機を手にした明(辰雄がモデル)を見て、急に興味を持ったかのように、彼女を「ちっと」「見つめ」と、菜穂子は「真つ赤」になつて、部屋を飛び出してしまふのである。三村夫人はその話を聞きながら、その時菜穂子が「妙に大人びて見えた」にもかかわらず、菜穂子にも「よくわからないらしかった、その時の」恥ずかしさとも怒りともつかない気持の「原因」を、「それ以上知ろう」としなかつたことを後に悔いている。それは『ルウベンスの偽画』で、バルコニーの下でブランコに乗っていた時、運転手に見られたのを、彼女(総子がモデル)が彼女の母(広子がモデル)に話して、「それだけだったの?」と言われ、彼(辰雄がモデル)が再三顔を赤くする場面に対応するだろう。辰雄は『物語の女』について、

私は再びせつかちに私の二十代の最後の小説にとりかかった。それが私の過去の作品の無意味な繰返しになりそうなことは自分にも分かつてゐた。しかしその時はどうしてもこれを書いてしまわなければ他のものには手がつかないやうな気持ちだつた。

(『続ブルウスト雑記』)

と述べている。

様々な行き違いはあつたにせよ、『聖家族』の最後に、細木夫人の「神々しい」顔に見入る絹子の眼ざしが、

だんだんと古画のなかで聖母を見あげてゐる幼児のそれに似てゆくやうに思はれた。

と記すように、総子が辰雄にとって、繊細で美しく可愛い憧れの女性だったことは、紛れもない事実だつたろう。そしてまた、誰もが経験するやうに、くるくる変わるこの世の人の心に翻弄されながらも、『聖家族』の最後の章で、

——娘は誰かを愛してゐる。自分が、昔、あの人を愛してゐたやうに愛してゐる。そしてそれはきつと扁理にちがひない……

と細木夫人がつぶやくやうに、総子が辰雄を愛していたことも事実だつたろう。彼女が、彼女の小説も載せる「文学」の出版元である第一

書房の福田清人のもとに、

遊びに来ないか、ここにはガタガタきしむベッドもある

といった「女性としては無神経な」絵葉書を、軽井沢から出すような、一筋縄ではいかない野心家で誇り高い厄介な女性だったとしても。

とすれば、そんな総子の心を、辰雄が確かなものにするのができなかったのは、それは辰雄が、総子にまともに向き合っていなかったから、言い換えれば、辰雄にとって総子が、今はもう遥かに遠い手の届かない「雲」のような存在、既に失われてしまった最愛の母・志気に重なる「聖母」のような、そしてまた「偶像」にも等しい広子の身代わり、にすぎないような存在だったからではなからうか。身の回りのすべてものは、己の心の鏡と言われるように、総子はある意味で辰雄の心の鏡、「裏返し」だったように思われる。

——この稿続く——

(附記) 本稿は、【国際交流・観光文化(国際・比較)】の講義がもとになってできました。困難な就職活動のさなか、熱心に受講してくれ

た学生の皆さんにお礼申します。ありがとうございます。幸多からんことを!!